

自分に合った犬を選ぶ

病院で犬の問題行動のカウンセリングをやっていると、飼い主さんと犬の性格が合っていないために問題が起こっているケースが少なくありません。

飼い主さんは口をそろえて「こんな犬を飼わなければ、こんなに悩まずにすんだのに。」とおっしゃいますが、その犬もこの飼い主さんに飼われなければこんな問題は起こさなかったかもしれないのです。

自分に合っていない犬を選んでしまったことがそもそも間違いの始まりなのです。

犬を飼う前に、自分は何を期待して犬を飼うのか、どのようなペットライフを思い描いているのかとすることをもう一度よく考えてみてください。そして犬以外の動物も含めて**自分の性格、ライフスタイル、住環境、家族構成を考えてペットを選ぶ**必要があります。

自分に合ったペットを選ぶことがペットとの生活を楽しむための大切な第一歩です。

1.犬種選びの前に

犬種選びをする前に、そもそも犬が自分に合ったペットであるかを考え直さなければなりません。場合によっては犬以外のペットを飼った方が良いかもしれません。

問題行動を持つ犬を抱えて相談に来られる飼い主さんの中にも、犬を飼うのは向いていないのではないかと感じる方がいます。犬種によって性格等にかなり違いがあるので、人それぞれ自分に合った犬は見つかるものなのですが、次のような方には犬以外のペットの方が良いと思います。

！ 犬の上に立てない人

ペットをとことん甘やかしたい人、猫かわいがりしたい人、ペットに尽くしたい人、崇拝したい人、などは犬を飼う事は向いていません。

犬は上下関係をはっきりさせる動物で民主主義は通用しません。猫かわいがりするとわがままになるばかりでなく、飼い主をリーダーと認めなくなり、さまざまな問題行動を取るようになります。この状態を**アル**

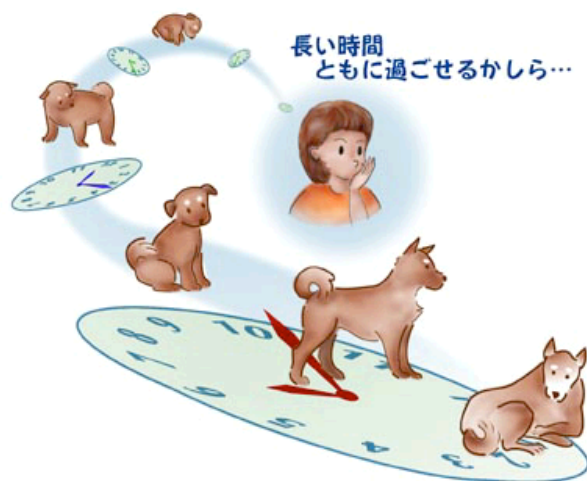
ファーシンドロームといい、飼い主が困るだけでなく、犬自身も決して幸せとは言えません。

所詮犬が人間社会で本当の意味でのリーダーになることは不可能です。頼れるリーダーがおらず、しかも自分も真のリーダーにはなりきれないという中途半端な状態では、犬は精神的に不安定になってしまいます。

人間社会で暮らし、人間を群れの仲間とする犬にとっては、飼い主を良きリーダーとして、そのリーダーに従って暮らすことが一番の幸せなのです。

時間のない人

仕事で朝家を出たら夜遅くまで帰らない人は、ペットを飼う事自体無理がありますが、特に犬を飼うことはお勧めできません。



犬は群を作る動物で、一匹でいることを好みません。仲間とコミュニケーションする時間や社会的刺激が充分に必要なのです。**ほったらかしの犬は必ず問題行動を起こし始めます。**

また犬は散歩やしつけにも時間が必要です。犬に充分な時間を使う事が出来ないのであれば、飼わない方がお互いのためです。

また**食事や病気の予防などにかかる費用は、猫や小鳥、その他の小動物に比べると割高となりますので、飼育にかかる費用等も考慮に入れておく必要があります。**

す。

自分が犬を飼うのには向いていないかも知れないと思われるのであれば、犬以外のペットを検討してみたいかがでしょうか？

余談ですが、犬以外の動物といっても**野生動物はペットには向いていません**。近ごろペットショップで珍しい動物を見かけるようになりましたが、野生動物を一般の方がペットとして飼うことは大きな間違いです。

まず第一に人畜共通伝染病などに関する調査も不十分である上に、行動学に関して未知の部分が多く、飼うこと自体の安全性にも疑問があります。

またかれらにとって必要な栄養素や病気については未知の部分が多く、うまく飼えずに病気になったり死んでしまうことも少なくありません。たとえ飼うことが出来ても我々の生活の中で野生動物が必要とする環境を十分に満たしてあげることは難しく、彼らが本当に幸せとは言えません。

さらに結局途中で飼いきれなくなり捨ててしまうと、日本の自然の生態系を破壊する危険性があります。

珍しさや見かけのかわいらしきで野生動物を飼うことは絶対にやめましょう。

2.自分に合った犬の性格とは？

「犬種選びの前に」の項でお話しましたように、残念ながら犬を飼うことが根本的に向いていない方もいます。しかし現在ある犬種は実に多種多様ですから、たいていの人には自分に合った犬種が見つかるものです。

自分に合った犬を選ぶにあたって、まず**自分の性格やライフスタイル、住環境、家族構成などについて検討していく必要があります。**

自分の性格

犬に対して威厳と愛情をもって接することが出来る人であれば、多少支配的な性格の犬（飼い主にたいして反抗的な犬）でもコントロールできるでしょう。しかし犬にたいして曖昧な態度をとったり、甘やかして

しまう人が支配欲の強い犬を飼うと、逆に犬の方が、飼い主をコントロールしようとしてさまざまな問題行動を起こすことになります。



ライフスタイル

犬をおいて家を留守にする時間が長い人なら、出来るだけいたずらやむだばえが少なく、運動量も少なくても良い犬種が良いでしょう。犬とアウト・ドアを楽しみたい人、長時間の散歩が出来る人には遊び好きで、活動性の高い犬種でも飼うことが出来るでしょう。

住環境

集合住宅や町中で飼うのであれば、むだばえの可能性が少なく、運動量もあまり必要でない犬種が良いでしょう。逆に、家の密集していない地域で番犬として飼うのであれば、テリトリー意識が強く、よく吠える犬種が役立つ場合もあります。

飼い主の年齢・家族構成

飼い主の年齢や家族構成によっても犬種を考える必要があります。その際、犬はこれから十数年一緒に暮らすわけですから、**現在の状況だけでなく十数年後の状況も予測しておく必要があります。**

たとえば小さい子供がいる家庭や将来子供が生まれる可能性があるのなら、なるべく子供に咬みつく危険性のない犬を選ばなければなりませんし、老夫婦や健

康に自信のない方は、体が大きく運動量のたくさん必要な犬種はさけるべきでしょう。またすでに犬やその他のペットを飼っている家庭ではそのペットとの折り合いも考えて犬を選ぶ必要があります。

もしサイズの大きな犬を飼いたいと思われるのであれば、十数年後にその犬が年をとった時、そして病気になった時、その時点であなただけの体力や経済力（大型犬のほうすべてにおいて経済的負担は大きいのです）があるか、というところまで考えてみてください。

人間の子供であれば大人になれば自立して自分の力で生きていくでしょうが、犬は生涯飼い主が守ってあげなければ生きていけないのです。途中で手放すということがないように、その犬の一生に責任を持てるかを飼う前に考えてみてください。

3.犬種の選び方

それぞれの犬種の用途を知ること

我々は犬種を選ぶとき、つい外見の好みで選んでしまいがちです。犬種によってその外見と同じように性格が異なります。その犬種の性格がたまたま自分に合っていれば良いのですが、合っていなければ大変な問題犬をかかえることになってしまうかもしれません。犬種選びには外観よりも性格的な特徴をよく考えて選びましょう。

我々人間と犬との付き合いは古く、犬が家畜として飼われるようになったのはおよそ1200年程前とも言われています。

その間、人間は犬をさまざまな目的のために活用してきました。そしてより効率よく仕事ができるように、都合の良い特性を持つ犬同士をかけ合わせたり、好みの外観を持つ犬を作るために、同じ特徴を持つ犬同士をかけ合わせるといった選択的交配を繰り返してその用途に応じて必要な特性を強めて、現在あるような純血種を作り上げたのです。

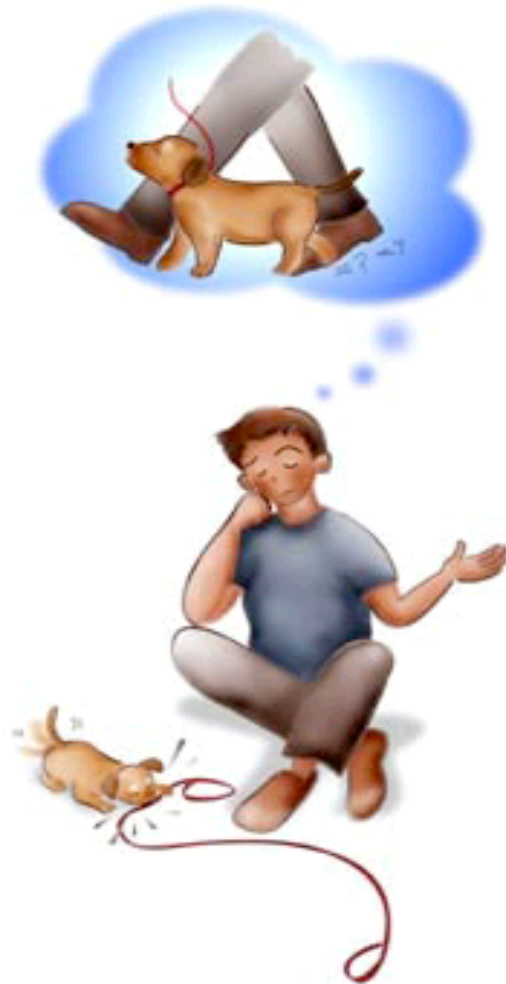
犬種の分類の方法はさまざまですが、その用途によって牧羊犬、猟犬、番犬、使役犬、愛玩犬などがあります。

愛玩犬はその名の通り、多くの人にとってペットに適していますが、ペット以外の目的で作られた犬種を飼う場合には十分な配慮が必要です。

仕事をする事を目的として作られた犬種

動物病院の診察室でのよく見る光景です。若いラブラドルレトリバーが元気良く診察室に突進してきてニコニコしています。犬にひきずられるように後から入って来た飼い主さんがため息をつきながら「先生、ラブって普通おとなしいんじゃないんですか？何でうちの犬はこうなんですか？」

ラブラドルレトリバーはおとなしくてお行儀の良いイメージを持って飼われる方が多いのですが、そのイメージのもとになっている盲導犬は、専門の訓練士さんの大変な努力によってあのように訓練されているのです。



確かにラブラドルレトリバーは頭が良く、訓練性能抜群でしかもやさしい性格なので盲導犬として使われるのです。ただし盲導犬としての大変な仕事をこなすためには同時に相当のスタミナも持ち合わせていな

ければいけません。（しかもラブラドルレトリバーは鳥猟犬です。）野山をかけまわり、川を泳いでハンターの撃った水鳥を回収する作業をする犬です。彼らのありあまるエネルギーを十分に発散させてあげるためには相当の運動量が必要です。

そのエネルギーを十分に使えずに、絶えず欲求不満の状態の犬達は、よく飼い主さんが言うところの「落ち着きがない、言うことを聞かない犬」になります。

同様に、仕事をする事を目的とした犬種に、シベリアンハスキーがあります。シベリアンハスキーはそり犬です。厳しい環境に良く耐える働き者です。それゆえそのスタミナは想像を越えるものがあり、狭い場所でじっとさせておけばストレスがかかり必ず問題行動を起こします。

何年か前、ハスキーが一世を風靡した頃がありました。あの魅力あふれる外観にあこがれて飼った人が多いのではないのでしょうか。ところが本来働き者のハスキーが退屈な生活に我慢できずさまざまな問題行動を起こし、途中で放棄されてしまった例も多かったようです。彼らの起こした問題は彼らのせいではなく、彼らにとって必要な生活を与えなかった飼い主の責任なのです。

人間と供に働くために作り出されたこのような犬種はとても賢く、高性能です。その性能を充分知り、発揮させてあげることが出来る人にとってはすばらしい犬となる反面、そうでない人が飼うと飼い主も犬も不幸な事になりかねないわけです。

犬を飼う前にまずその犬種がどのような目的で作られた犬種で、どのような性格的な特徴があるのかを知っておく必要があります。

さまざまな犬種の特徴

それでは「どんな犬種を飼えばいいの？」と聞かれても、この犬種がいいですよと言える犬種はありません。人それぞれ自分にあった犬種は異なりますし、自分自身で選ぶことが大切だと思います。

再三言っているように、犬は外見でなくその性格を重視して選ぶべきですが、なんとなく心をひかれる犬種があるのなら、その気持ちを大切にすることは少しも悪いことではありません。まずその犬種に関する情報を集めて検討してみましょう。

犬種の特徴は犬種別の本を読むのも良いのですが、特定の犬種についてのみ書かれた本は、その犬種の長所しか書いてない場合が多いので、**犬種選びをする時には、多数の犬種について客観的に書かれたものが良い**でしょう。



犬種の性格的な特徴について客観的に書かれた本としては、**ハート夫妻の著書「愛犬選び—日経サイエンス社」**がお勧めです。

この本には自分に合った犬種を選ぶために必要な13の基本的な行動上の特性を56の犬種について記載してあります。

その13の行動上の特性とは、過敏性、活動性、子供を咬む、むだぼえ、遊び好き、人なつこさ、いたずら好き、服従性、警戒咆哮、他犬への攻撃性、反抗性、領土防衛、トイレのしつけに関するものです。

ただし同じ犬種でもそれぞれ個性がありますし、国や地方によって差がある場合もありますので、必ずしも当てはまらない部分もあります。

飼いたいと思う犬種があれば実際にその犬種を飼っている人に話を聞いてみるのも良いでしょう。ただしこの場合にも同じ犬種でも性別や個体によって差がありますので、出来るだけ多くの人に聞いてみる事を

お勧めします。

また地域の動物病院の獣医師や動物看護師に相談してみるのも良いかもしれません。

もう一つ大切な事—大きさと被毛

これまで犬種を選ぶ際には、外見にとらわれず性格を重視する事を強調してきましたが、**犬の大きさや被毛の質や長さなどの外見は、犬種選びをする際にとっても大切な要素です。**

大型犬種を飼って「こんなに大きくなるとは思わなかった。食費がかかってとても養いきれない。」と犬を手放す人もいます。

また病気になった時も犬が大きいと、「自動車がないので動物病院につれて来る方法がない。」という話もよく聞きます。タクシーやバスなどではケージに入った犬は乗せてくれてもそのままでは乗せてもらえません。また自宅の車に乗せるにしても、大きな犬では体力や人手が必要となります。**病気になった時の世話にも大きな犬では大変な労力がいらすし、一般的に医療費も割高になります。**

食費や医療費、病気になった時の世話や動物病院への通院という点からは、大型犬種よりも小型犬種の方が明らかに飼いやすいと言えます。犬種を選ぶ際には必ず成犬を見て大きさを確認しておきましょう。

私達の病院でも大型犬種が大流行してから「十年経って、この子たちが年をとって病院に次々入院したらどうする？ その時の私達にこの子達を運んだり、世話をする体力がまだあるかしらねえ。」なんて冗談話をします。

大型犬種を飼うのにはさまざまな問題がある一方、大型犬種はおおらかで存在感があり、魅力的な犬種が多いことも確かです。生涯責任をもって飼うことが出来る条件が十分整っていれば、大型犬種を飼うこと考えても良いかもしれません。

また**シャンプーやカットにかかる時間や費用も重要なポイント**です。犬の被毛の手入れは、美容上、衛生上の観点だけでなく犬の皮膚の健康のためにも必要です。簡単なブラッシングや定期的なシャンプーだけでよい犬種もあれば、ていねいなブラッシングが欠かせない犬種、頻繁にシャンプーやカットが必要な犬種もあります。

犬の被毛の手入れに費やす時間的余裕があるのか、自分で出来ない場合にはペットの美容室に依頼する経済的余裕はあるかといったことも考えておく必要があります。

いろいろな事を考慮に入れて、やはり自分が飼うのは難しいと思う犬種ならいさぎよくあきらめましょう。それはあなたのためだけでなく、あなたの周りの人やその犬自身のためでもあるのです。

流行犬種について

動物病院にワクチンを打ちに来る仔犬の種類は見事なほど流行を反映しています。犬種にこれほど流行があるのは日本独特の現象のようです。洋服や車ならいざ知らず、犬種に流行があるのは不思議です。なぜなら犬とのおつきあいは今後十何年に及ぶもので、**流行に応じて買い換えたり出来るものではない**からです。

しかもある犬種が流行すると、その犬種の仔犬の需要をまかなうために、犬の大量生産が始まります。無計画に交配を重ねることによって遺伝的な疾患を持つ犬が増えることにもなるのです。

また大量生産された仔犬は、人間の手が行き届かず、人間との接触が少ないために、人との社会化が出来ていなかったり、親兄弟から早く引き離されて流通ルートにのせられるため、犬同士の社会化が十分出来ていない場合もあります。

これは飼い主にとっても犬にとっても不幸なことです。このような意味からも犬種の流行という現象はなくしていきたいものです。

その反面、確かに流行するような犬種はとても魅力的な事も事実です。あなたが流行とは関係なく、本当にその犬種が飼いたいと思われるのであれば、できるだけ大量生産された仔犬は避け、一般家庭で、性格が良く健康な親犬を交配させて生まれ、愛情いっぱい育てられた仔犬を譲ってもらうのが良いでしょう。

もちろんその犬種について詳しい知識を持ち、誇りと愛情を持って計画的に繁殖されているブリーダーさんから譲ってもらうことが出来れば一番安心です。

珍しい犬種

流行犬種を選ぶのとは逆に、人が飼っていない珍しい犬種に心ひかれる事もあります。珍しい犬種については本などを調べても記載が少なく、その性格についても飼ってみなければ分からない面もあります。

飼いにくいために一般的に飼われていないという可能性もありますので、飼う前に出来るかぎり情報を収集しておく必要があります。

どんな犬種を選ぶにしても、今後十数年もの間、家族として暮らすわけですから、決して見た目やその場の衝動だけで決めず、まずその犬種の事をよく知って、十分納得してから、決めてくださいね！

純血種か雑種か？



さまざまな犬種についてのお話をしてきましたが、昔は犬と言えば雑種がほとんどで、純血種は特別な犬というイメージさえありました。

おそらく犬の放し飼いという習慣がなくなった為に、予定外の交配が少なくなったのでしょう。雑種犬はいつの間にかどんどん減って、現在では私の病院でも来院する犬のほとんどが純血種です。

時々雑種の飼い主さんで「こんな雑種ですけれどかわいいで…」と申し訳なさそうにおっしゃる方がいらっしゃいますが、**雑種であることを恥じる理由は何もないのです。**

動物行動学で名高いフォックス博士が日本で講演された時、雑種犬の事をナチュラルドッグと呼んでいらっしゃいましたが、確かに考え方によっては純血種は人間が自分たちの好みで不自然に作り出したものであり、雑種犬こそ自然な犬とも言えるかもしれません。

よく「雑種は病気になりにくい。」と言われますが、雑種も純血種と同じようにさまざまな病気になります。それなのに純血種の方が雑種よりも病気になりやすいと思われる理由として、次のようなことが考えられます。

遺伝的疾患：

まず純血種ではそれぞれの犬種によって多発するような遺伝的な疾患を持つ事があります。

流行犬種の仔犬の需要をまかなうために、わざわざ問題のある犬を交配に使うなどと言うことは論外ですが、たとえどんなに注意して交配をしても、もともと同じような遺伝子を持つ者同士を交配させて生まれる純血種では、その種に多発する遺伝的疾患を完全になくしてしまうことは困難でしょう。

従って純血種を選ぶ場合は特にその犬種に多発する**遺伝的な疾患について調べ、仔犬の親犬に問題がないかを確認しておく事をお勧めします。**

伝染病：

伝染病にかかりやすさは雑種でも純血種でも変わりはないのですが、たくさんの犬のいる繁殖場で大量生産され、早い時期に母犬から離されて販売ルートに乗せられる純血種では、病原体にふれる機会が多く、ストレスもかかりやすいため、伝染病が発症してしまうリスクが高くなります。

一方**性格の面では、雑種は純血種と違って仔犬の時に将来の姿や性格を予測する事が困難**です。親犬がわかっていればある程度予想は出来ますが、母犬はわかって、父親はわからないと言うことも多いものです。

また動物保護施設などにいる場合には多くの場合、全く情報はありません。保護施設の仔犬の中には、大切な社会化期をケージの中で隔離されて生活したり、

捨てられて放浪している間にイヤな体験をしたりして臆病な性格になっている場合もあります。

このような性格の仔犬では家庭犬として飼うには障害となる事もありますので、見かけのかわいらしさだけにとらわれず、仔犬の行動を良く観察して決める必要があります。

これらの多くは純血種と雑種の違いと言うよりは、商品として生まれる仔犬と望まれずに生まれる仔犬、そして家族の一員として祝福されて生まれる仔犬の違いと言えるのかもしれませんがね。

雄を飼うか雌を飼うか？

雄と雌のどちらを選ぶかは基本的には飼い主の好みです。

ハート夫妻の書かれた愛犬選びによると、雌犬の方が服従性が高くトイレのしつけがしやすい。また雄犬の方が活動性や攻撃性が高いとされています。（もちろんこれは同じ犬種で雄雌を比較した場合ですから、ある犬種の雌の方が別の犬種の雄よりも活動性あるいは攻撃性が高いと言うことは十分あり得ます。）

確かに動物病院に攻撃性の問題で相談にこられるのは、圧倒的に若い雄犬が多いのです。

また雄は散歩中にいろんな場所に尿をかけてまわるので、町中で飼う場合にはこの事が問題となることもあります。この点に関しては去勢やしつけによってある程度改善することも出来ますが、雌ではその心配はありません。

従ってあまり犬を飼った経験がなく、しつけにも自信がないのであれば、雌の方が飼いやすいと言えるかもしれません。雌はどちらかというと甘えん坊で、雄よりはおとなしい場合が多いのです。やんちゃ坊主と思いきり活動的な生活をしてみたいのであれば雄も良いかもしれません。

もちろんこれはあくまで一般論で、人間社会と同じようにやんちゃな女の子もいればおとなしい男の子もいます。

そして何よりも仔犬であればどんな種類を選ぼうと、雄であろうと雌であろうと、それなりにみんな甘

えん坊で、やんちゃで、元気いっぱいなのが普通です。ですから仔犬を飼う時には、どんな仔犬を選んでも当分の間は十分時間をかけて見守ってあげる必要があることをお忘れなく！

成犬になってから飼う時

犬を飼う時には仔犬からだけでなく、知人から飼えなくなった成犬を引き取ったり、動物保護施設のような場所から成犬を引き取る事もあります。

この場合犬の性格は、既にほぼ完成されていると考えなければなりません。従ってその犬の性格を十分知った上で飼うことを決めるべきだと思います。

仔犬特有の落ち着きのなさや、ものを破壊するような問題に関しては、年齢とともに落ち着く傾向があるため、飼いやすい面もあります。

しかし問題行動のために手放されるというケースもありますので、出来れば前の飼い主さんから事情をよく聞いて慎重に検討してください。

そして慎重に検討した結果、飼う事を決心したのであれば、再び手放すと言うような、犬にとって非常に不幸な経験を繰り返させないためにも、十分な努力をしてください。

患者さんの中には、問題のある成犬を引き取って上手にしつけをして、驚くほどうまく飼ってらっしゃる方もいらっしゃいます。もちろん問題のある犬をわざわざ引き取るということはお勧めしませんが、たとえ前の飼い主さんのもとでは問題のなかった犬でも、新しい環境で神経質になったり、新しい飼い主さんとのコミュニケーションがうまくいかず、問題を起こす事もあります。

このような犬には十分に時間をかけて、愛情をそそいであげる必要があるのです。どんなふうに対処して良いか判らないとき、問題が悪化しそうな時には、こじれる前に信頼できる専門家に相談される事をおすすめします。

4.子犬の選び方

同じ犬種でもその性格には個体差がありますし、同じ親犬から生まれた兄弟でさえその性格は異なります。特に雑種の仔犬ではその性格は予想が困難です。仔犬を選ぶ時には、その行動からある程度性格を予測

することもできます。

子犬の性格

犬の性格を大まかに分けると強気で支配的なタイプ、弱気で従属的なタイプ、それらの中間のタイプがあります。どちらの性格も極端な場合はとても扱いにくいペットになります。

支配的な性格の犬は、飼い主がリーダーシップをとれないと、飼い主にうなる、咬むといった攻撃性の問題を起こす事があり、犬を飼った経験がない人や、犬をしっかりしつける自信のない人には向いていません。従属的な性格の犬は、臆病で神経質な面を持つ事があり、やさしく扱って自信をつけさせてあげなければいけないので、これも犬の扱いに慣れていない方には難しいかも知れません。

犬の性格は遺伝と幼い頃の生活環境に大きく影響されます。まずは**穏やかな性格の両親を持ち、生後2ヶ月頃まで母犬に十分甘え、兄弟犬とも十分遊んで、しかもその飼い主である人間にも十分に愛情を持って育てられた仔犬を入手することをお勧めします。**

そして仔犬を飼う時には、実際にその仔犬をよく観察してから選びましょう。同じ親犬から生まれ、同じ環境で育った兄弟でもその性格は異なります。同腹の仔犬の中で、他の兄弟を押しつけて我先に食べ物を取ったり、兄弟の上に乗って遊んでいる仔犬は、どちらかという押しが強く支配的な性格です。いつも兄弟に上に乗られていたり隅っこでいじけている子は従属的で臆病な性格である可能性があります。

子犬の性格テスト

仔犬の時の性格が必ずしも生涯維持されるわけではありませんが、多くの犬は子供の頃からその性格の特徴を持っているものです。

仔犬の性格を予測するためにビルキャンベルが考案した仔犬の性格テストは有名です。ただし一方ではこのテストが必ずしも犬の性格を予測するのに有効でないというデータも発表されています。

確かに仔犬の性格をたった5分間で見極めることは難しいかも知れません。私自身は、きちんとした調査をしたわけではありませんが、仔犬のしつけ教室に



やってくる仔犬の性格テストをして、神経質な性格や攻撃的な様子が見られた仔犬は、成犬になった時にコントロールしにくい犬になっているという印象があります。特に極端な反応が見られた仔犬は、犬を飼うことに慣れていない人が飼うべきではないと思います。

テストそのものは簡単に出来ますが、判定にはある程度慣れが必要です。一般の方が判定するのは難しいかもしれませんが、参考のために紹介します。（これは何人かの専門家によってモディファイされており、もともとの方法と少し違います。）

- 1 体中を触る
- 2 持ち上げる（30秒間）
- 3 ひっくり返してお腹を撫でる（30秒間）
- 4 鼻面を軽く握る（30秒間）
- 5 目を見る（30秒間）
- 6 指の間を軽くつねる
- 7 大きな物音をさせる

1 - 5の項目に対して、仔犬は少し抵抗しても、しばらくするとあきらめておとなしくするのが普通の反応です。強く抵抗し続けたり、うなったりする場合は支配的な性格と考えられます。逆に全く抵抗せず固まった状態の仔犬は臆病な性格の可能性もあります。

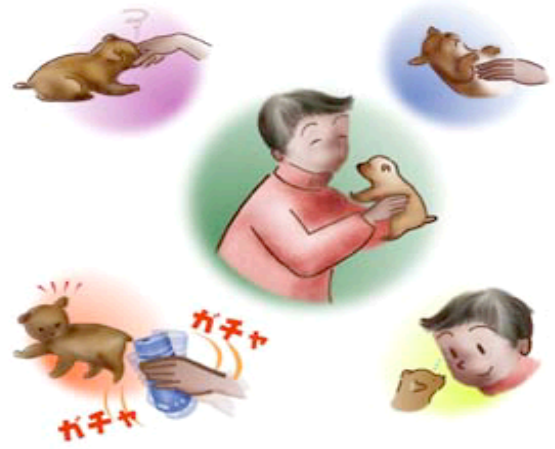
6では、仔犬はびっくりしてつねられた足を見たり、匂いを嗅ぐのが普通の反応です。うなったり嘔み

付いてきたりする場合は、将来攻撃性の問題を持つようになる可能性があります。

7では仔犬は少し驚いてもすぐに平静に戻るのが普通です。ひどく怯えて逃げ出したり、ぶるぶる震えたりする場合には神経質で臆病な性格である可能性があります。

5. 「自分にあった犬を選ぶ」の項の最後に

さてここまでお付き合いくださった皆さん、自分にあつた犬は見つかりそうですか？　ここまで考えて選んだペットなら、将来問題を起こす可能性は半分減ったと思っても良いと思います。あとの半分はあなたがその子にとって良い飼い主になれるかどうかにかかっています。さあ一緒に勉強しましょう！



このペーパーは株ペット・ペット社が提供する

PET LOVERS' FORUM (<http://www.pet-vet.or.jp>)で、
もみの木動物病院 村田香織先生が提供されたものを一部改編して作成しております。

イラスト著作：くぼじょうこ

このペーパーは下記当院のインターネットホームページで24時間無料で取り出せます。また、ホームページには他にも様々な情報が掲載してありますので、ぜひご覧ください。



Copyright (C) 2001 Tatsuya Fukuyama DVM , AFP IKI ISLAND VETERINARY CLINIC.
Tel 0920-47-6767 Fax 0920-47-0350 e-mail: foffice@bronze.ocn.ne.jp
<http://www.ikikoku.com/pet.html>